

令和6年度

No.	プロジェクト名	本学担当者	共同研究機関・担当者		研究内容(連携事業内容)
1	小学校不登校に関するプロジェクト研究―児童が安心して成長できるソーシャルサポートルーム(SSR)のあり方	芦谷 道子	滋賀県総合教育センター 所長 獅子堂 秀雄	次長 大林 義宜	小学校不登校傾向児の学校での居場所である、SSRの環境整備を進め充実させることを通して、SSRがその場を利用する児童にとって安心して成長できる居場所となることを目指す。
2	高等学校理科プロジェクト研究	藤岡 達也	滋賀県総合教育センター 所長 獅子堂 秀雄	参事 加藤 由紀、 係長 澤 寿朗、 研修指導主事 木村 晋輔、 研究員 福西 洋一	「生徒が主体的に学習に取り組むことができる高等学校理科の授業改善―探究の過程を踏まえた授業のデザインをしやすい手立てを通して」を研究の目的として、複数の学校間の連携を取り入れた、探究の過程を通じた学習活動及び評価の在り方を検討し、その意義と課題を明確にして、県下の理科教育の充実を図る。
3	デジタル・シティズンシップの育成を目指す中学校における取組のあり方 ―デジタル技術の活用に焦点を当てた各教科等の連携を通して―	岳野 公人	滋賀県総合教育センター 参事 加藤 由紀	研究員 中西 祐二	デジタル技術の活用に焦点を当てて、各教科等が連携して継続的に学習を進めていくことで、生徒の「自ら判断し、責任ある行動ができる力」と「積極的にデジタル社会と関わっていく態度」を養い、デジタル・シティズンシップを育成する。
4	幼稚園における遊びの中で気づき、学び、楽しむ魅力的な造形活動の追究 ～造形遊びや鑑賞活動を通して～	青木 善治	豊郷町立豊郷幼稚園 園長 大和 高成	園長 大和 高成	幼稚園児における造形遊びや鑑賞活動の効果を検証する。 申請者は4月に依頼を受け、6月に豊郷幼稚園教員を対象として造形遊びや鑑賞活動の研修会講師をさせていただいた。その研修会の内容を受けて、今後も、子どもたちを対象とした造形活動や対話型鑑賞活動などの共同研究の依頼を受けている。幼稚園児を対象とした適切な題材や材料、働きかけ、支援の在り方等を明らかにしていくことは極めて重要と考えている。実際の子どもの姿を相互行為分析し、エスノメソドロジーの研究手法を援用し、題材開発も行いながら、一体どのような学びが育まれているのかを質的研究によって、明らかにしていきたい。
5	保育園における遊びの中で気づき、学び、楽しむ魅力的な造形活動の追究 ～造形遊びや鑑賞活動を通して～	青木 善治	豊郷町立愛里保育園 園長 小野 淳	園長 小野 淳	保育園児における造形遊びや鑑賞活動の効果を検証する。 申請者は4月に依頼を受け、6月に愛里保育園教員を対象として造形遊びや鑑賞活動の研修会講師をさせていただいた。その研修会の内容を受けて、今後も、子どもたちを対象とした造形活動や対話型鑑賞活動などの共同研究の依頼を受けている。保育園児を対象とした適切な題材や材料、働きかけ、支援の在り方等を明らかにしていくことは極めて重要と考えている。実際の子どもの姿を相互行為分析し、エスノメソドロジーの研究手法を援用し、題材開発も行いながら、一体どのような学びが育まれているのかを質的研究によって、明らかにしていきたい。
6	アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成2024 ～対話型朝鑑賞(朝鑑賞)の活動を通して～	青木 善治	彦根市立平田小学校 校長 北川 祐子	校長 北川 祐子	朝学習時における朝鑑賞(対話型朝鑑賞)の効果を検証する。 小学校には「朝読書」「朝学習」など、朝学活前に短時間の学習活動を行う時間がある。その朝学習に充てている時間を活用し、月1～2回程度、学級担任が美術作品を使用し、朝鑑賞「対話型鑑賞」を実施する。特定の美術についての知識を介さずに作品を楽しむ体験を他者と共有することを通して、アート思考や、想像力や自分で考える力を育てること、自分の考えを話す力や他者の話を聴く力といったコミュニケーションの能力や新しい意味や見方や感じ方並びに自己肯定感を育むことが可能となる。申請者の前任校および、埼玉県所沢市立三ヶ島中学校において効果のあった朝鑑賞を共同研究依頼のあった彦根市立平田小学校において実施し効果が表れている。アート思考や教師の変容にも着目しながら、その効果や課題及び適切な題材等を更に明らかにしていく。

No.	プロジェクト名	本学担当者	共同研究機関・担当者		研究内容(連携事業内容)
7	アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成2024 ～大規模校における対話型朝鑑賞(朝鑑賞)の活動を通して～	青木 善治	米原市立米原小学校 校長 億田 明彦	校長 億田 明彦	大規模校における朝鑑賞(対話型朝鑑賞)の効果を検証する。 彦根市立平田小学校の朝鑑賞の取り組みを新聞記事(2021年11月20日しが彦根新聞)より知ることとなった米原小学校長より、朝鑑賞に関する共同研究の依頼を受け、今年度も共同研究の依頼を受けている。 米原小学校は学年3学級以上の大規模校である。滋賀県内には大規模校も多くあるため、大規模校における朝鑑賞の成果や課題及び適切な題材等を明らかにしていく。そして、アート思考を高める上でも極めて有効であることを更に明らかにしていきたい。
8	「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう小・中学校における校内研究のあり方Ⅱ ～児童生徒の学びの見取りに重点を置いた教職員の探究的な学びを通して～	○辻 延浩(教職大学院) 齋藤昌代(附属小学校 副校長)	滋賀県総合教育センター 参事 加藤 由紀	主査 高橋利彰 研修指導主事 中西宏美 研究員 島内 佑祥・竹内達哉	これまでのプロジェクト研究の成果と課題を踏まえて、本研究では、児童生徒の学びの転換を実現するために、「児童生徒の学びの姿の見取りに重点を置いた教職員の探究的な学び」について検討する。「探究的な学び」とは、教師自らが問いを立て実践を積み重ね、振り返り、次につなげる学びである。自身の強みや個性を生かして学ぶことを「個別最適な学び」と捉え、その学びを生かし教職員同士の学び合いの中で、授業観を捉え直したり、新たな問いを立てるヒントを得たりすることを「協働的な学び」と捉えている。トータルアドバイザー兼共同研究者として参加し、本プロジェクト研究で得られた成果を附属学校園での取り組みにも生かす。
9	大津市中学校部活動地域移行検討プロジェクトP(3年次)	辻 延浩	大津市教育委員会事務局 学校教育課 課長 上杉 康晴	学校教育課 課長補佐 浅野 和成 指導主事 柴原 良樹 他	昨年度検討できなかった地域の受け入れに関して現状と課題を整理し、中学校部活動の地域移行に向けた具体策を協議する。また、活動対象を限定してモデル実践に取り組み、資料提供を行う。
10	校内研究からみる学校改革 ～小中9年間の学びと両校種の教職員間の連携を深めるLesson Studyシートの充実～	渡邊 慶子	甲賀市教育研究所 課長補佐 小松 史子	甲賀市教育研究所 木村 健二 甲賀市立水口小学校 早川 和彦 甲賀市立伴谷東小学校 橋本 泰志 甲賀市立城山中学校 桑原 章哲	甲賀市教育研究所では、令和4年度に、それまでに活用してきたOJTシートからLesson Studyシート(以下、LSシート)を開発した。効果的な校内研究を行っていくために、教職員間での情報共有をより効率的に行い、LSシートを活用し、その効果を実証していくことを目的とする。昨年度の取組では、LSシートを各校で工夫しながら、授業者や校内研究主任の思いを反映し、その有効性や汎用性を実証することができた。本年度は、同一中学校区に焦点を当て、長いスパンで中学校区内の児童生徒を育てるという視点をもち、LSシートを活用して小中が連携し、各校の授業実践や各部会の内容を共有して校内研究に取り組み、教職員一人一人の力を校内全体でビルドアップさせることを目指す。また、校種や校内研究のもち方が異なる3校が連携し、各校の校内研究主任が意見を交わし合う中で、自校の実践の見直しや工夫につながる場にするとともに、校区内の目指す児童生徒の姿、つきたい力等を共有し、校内研究の活性化につなげる。
11	数学的に考える資質・能力の育成に向けた問題開発・解決の過程を遂行する高等学校数学科の授業改善 —数学的活動を充実させる指導の工夫を通して—	渡邊 慶子	滋賀県総合教育センター 所長 獅子堂 秀雄	研究指導主事 大石 泰士 研究員 長井 翔也	滋賀県内の高等学校の数学科指導者が、数学的活動を充実させる指導の工夫を通して、問題発見・解決の過程を遂行する高等学校数学科の授業改善を進めることで、生徒の数学的に考える資質・能力を育成できる授業の構成原理を作成することを目指す。
12	継続した運動遊びにつながる園内研修のあり方	山田 淳子	草津市立笠縫こども園 園長 管 久美子	副園長:鵜 奈緒子	本研究では、年間を通して継続した幼児の運動遊びにつながる園内研修を試み、その成果を幼児の遊びに関わっていく姿から検証することを明らかにすることを目的とする。特に本研究では運動遊びに焦点を置き、こども園の教育・保育目標の合言葉「みんな友だち 遊ぶの大好き 笠縫っ子」の達成につながるような実践を大学担当者と保育者(担任)とで行っていく。
13	幼児を対象とした運動遊びカルタの開発と実践	奥田 援史	滋賀大学教育学部 附属幼稚園 副園長 大矢 明	滋賀大学教育学部 附属幼稚園 副園長 大矢 明 2 / 5 ページ	滋賀県の幼児の運動能力は低い水準にある。その主な原因は活動量の低下である。そこで、幼児の活動量が増えることを目指した運動遊び教材を開発し、実践する。これまでに、本教育実践総合センター(令和4年度共同研究)の支援をいただき、運動遊びカードを作製したので、これを改良した運動遊びカルタを開発、実践する。

No.	プロジェクト名	本学担当者	共同研究機関・担当者		研究内容(連携事業内容)
14	投げる動きを積極的に取り入れた運動遊びの保育実践	奥田 援史	滋賀大学教育学部 附属幼稚園 副園長 大矢 明	滋賀大学教育学部 附属幼稚園 副園長 大矢 明	最近、ボールを投げたり捕ったりが上手くできないため、幼稚園で「ドッジボール」を楽しむことが難しくなっている。そこで、投げる動きを積極的に取り入れた運動遊びの内容を工夫し、実践することを目的とする。
15	中学校特別支援学級の生徒の「共に学ぶ交流及び共同学習」の充実 ― 生徒が持てる力を発揮するための自立活動を通して―	窪田 知子	滋賀県総合教育センター 所長 獅子堂 秀雄	研究員 石田 あすか	特別支援学級に在籍する生徒が、持てる力を発揮し、学習活動に参加している実感や達成感を得られるよう、「自立活動」および「交流及び共同学習」のあり方について検討する。
16	ことばの教室における読み書きチェックの活用について	窪田 知子	X	X	児童の読み書きのつまずきを把握し、効果的な指導や支援につなぐことを目的に行っている読み書きチェックの活用の仕方について、子どもの実態の変化やこれまでの結果の分析などをもとに検討する。
17	児童一人ひとりが自分の考えを数学的に表現する力の育成 ― 1人1台端末を用いた学びの蓄積と活用を通して―	大橋 宏星	滋賀県総合教育センター 所長 獅子堂 秀雄	参事 加藤 由紀 研究員 橋本 健	小学校算数科において、「読み解く力」の視点を踏まえた問題発見・解決過程の四つの段階を基に授業構想を行い、1人1台端末を用いた学びの蓄積と活用を通して、児童一人ひとりが自分の考えを数学的に表現する力の育成を目指す。
18	確かな学力を身に付け、自ら考え学び合う児童の育成をめざして ―「読み解く力」の視点を踏まえた、確かな学力を身に付ける算数科の授業づくり―	大橋 宏星	東近江市立 能登川北小学校 校長 木村 直人	教諭(研究主任)木村 大喜	①めあてを発見するための4つの方法(ズレ、対立、障壁、疑問)から、子どもたちとともにめあてを設定し、学習意欲を高める ②振り返りの場面で自分の学びを確認したり、自己の変容に気付いたりしたことを整理し、文章を書く活動を充実させる ことにこだわって授業展開し続けることで、子どもたちの学びに向かう力を高め、思考力や表現力を育成することをめざす。
19	自分の考えに自信をもち、共に学び合う姿を引き出す授業づくり ― 自力解決と集団解決を連動させて深めた学びを児童自身が実感できる算数科の指導を通して―	大橋 宏星	栗東市立治田西小学校 校長 杉田 信一	教諭(研究主任)岸本 千晶	個別最適な学び・協働的な学びを軸に、児童の課題を把握し、それに応じた支援に取り組み、児童同士をつなぎ、交流の視点を明確にした授業づくりに取り組めば、児童がわかる・できる楽しさを実感し、学びを高めることをめざす。
20	特別支援学校教育相談担当者研修の実施 ― アセスメント力の育成に焦点をあてて―	山川 直孝	滋賀県立北大津養護学校 校長 武田 英明	教諭 中村 佳代	特別支援学校の教育相談担当者は、自校の児童生徒への支援と関わって保護者や担任等への相談、支援にあたるほか、特別支援学校のセンター的機能の役割を果たすべく、小・中学校等に在籍する児童生徒、保護者、教員等への相談支援も行っている。的確な助言を行うため、主訴に応じて実態把握を行うことが必要であり、児童生徒を観察したり、心理アセスメントを実施したりすることが求められる。 そこで本研究では、特別支援学校教育相談担当者の資質向上を目的に、最新の心理アセスメントを取り入れた研修プログラムを開発し、そのプログラムの効果を実証するための研修を行う。研修は心理アセスメントの概要についての講義のほか、事例検討を取り入れた演習を行う。心理アセスメントに関する深い知識と理解、さらには具体的な活用について一体的に学ぶことにより、アセスメント力の育成をめざす。
21	中学校における特別支援教育研修の実施	山川 直孝	長浜市立西中学校 校長 東野 裕賢	教諭 澤田 智子	特別支援学級に在籍している生徒や通常の学級における特別な支援を必要とする生徒が増えている。コロナ禍以降、不登校も急増している。このことから、学校全体で共通理解の上、支援を進めていくことが求められている。本研究では、昨今の特別支援教育に関する動向や、発達障害や精神疾患等への支援についての内容が充実した生徒指導提要等にもふれながら、特別支援学級や通常の学級の中での支援について、教員の理解を促すことや支援の改善につなげることを目的として研修を行っていきたい。研修はペア・グループワークを取り入れる。各自が教員用タブレット端末を活用した意見交流も行う。教員同士の対話により、多様な意見にふれることで、教員に気づきを促し、これまでの自身の実践を省察することで、生徒への支援の見直しや授業改善につなげたい。

No.	プロジェクト名	本学担当者	共同研究機関・担当者		研究内容(連携事業内容)
22	中学校音楽科における箏の授業開発プロジェクト	林 睦	滋賀大学教育学部 附属中学校 校長 糸乗 前	教諭 高月 道代	中学校音楽科における箏の指導について、附属中学校研究協議会(11月15日)とも関連させ、地域の学校に新たな箏の授業の提案をすることを目的とする。
23	打出中学校 OJT研修による人材育成 ～心をたがやすボトムアップ～	田中 満	大津市立打出中学校 校長 福井 善行	教諭 白井 貴晃	昨年度からの継続で、OJTに主眼をおき、授業力・生徒指導力・学級経営力・組織対応力の教師力向上を図ることをねらいとする。昨年度は、週初めの月曜日に研修を設定していたが、生徒対応が多く発生する週初めを避け、余裕をもって話ができる日を検討する。また、時間についても見直す必要がある。今年度は滋賀大学田中研究室と共同研究を行う。
24	教職員の学びを再構築 ～PBL型手法を用いた校内研究を窓口～	田中 満	栗東市立大宝東小学校 校長 中川 章子	校長 中川 章子 教諭(校内研究主任) 窪田 和也	教科限定、単一研究テーマのもと研究を推進する従来型の校内研究は、校内研究主任や推進部会員、授業公開者にとっては大きな学びを得る機会となっているが、果たして全ての教職員の当事者意識を引き出しているのだろうか。このような疑問から、本研究では、これまでの校内研究のあり方について再構築を図り、全教職員の当事者意識を引き出す研究のあり方について探ることを目的とする。具体的には、PBL(課題解決学習)型手法を用いて校内研究を推進し、その効用と課題について明らかにすることを主な内容としていきたい。今年度は滋賀大学田中研究室と共同研究を行う。
25	小学校における児童自ら主体的に探求する姿勢の育成について	田中 満	大津市立 仰木の里東小学校 校長 山尾 健一	教諭 古川 祐子	本校では継続して学校教育目標を「自ら学び、心豊かでたくましい子どもの育成」としてきた。今年度は特に「自ら学び」に焦点を置き、めざす学校像を「子どもの笑顔が輝く学校をめざして～探求的な学習の充実～」とした。児童自ら主体的に探求する姿勢を育成するための授業改善について、校内研究を推進することを目的とする。今年度は、滋賀大学田中研究室と共同研究を行う。
26	子どもが夢中になって学ぶ授業を目指して ～授業について「見方・考え方」をもって語れる教師集団を礎として～	北村 拓也	東近江市教育研究所 所長 栗田 一路	東近江市教育委員会 指導主事 榎並 洋貴	国語科において、育成を目指す「資質・能力」を明確にし、授業について自分なりの見方・考え方をもち、それと比べながら相手の話を聞き、自分の考えの変容や広がり発信できる子どもの育成を目指し、国語科の授業において、育成する資質・能力を明確にし、子どもたちの「聴きたい」「話したい」という思いを引き出したり、子ども同士の話し合いを深め、それを自分の言葉で発信したりできる授業づくりの視点を見いだし、授業改善につなげる。
27	話し合いの深まりをめざして ～話してよかった 聴いてよかったと 感じられる伴谷っ子～	北村 拓也	甲賀市立伴谷小学校 校長 中嶋 政二	教諭(校内研究主任) 杉本 賢吾	「自分の考えをもち、それと比べながら相手の話を聞き、自分の考えの変容や広がり発信できる子どもの育成」を目指し、国語科の授業において、育成する資質・能力を明確にし、子どもたちの「聴きたい」「話したい」という思いを引き出したり、子ども同士の話し合いを深め、それを自分の言葉で発信したりできる授業づくりの視点を見いだし、授業改善につなげる。
28	言葉を大切にし、自分の考えを豊かに表現する子を育てる	北村 拓也	栗東市立治田小学校 校長 田中 覚	教諭(校内研究主任) 中村 百合	『伝えたい！』『書きたい！』という意欲をもって、自分の思いや考えを、豊かな表現と適切な言葉で相手に分かりやすく書き表す子どもの姿を目指し、主体的に「学びとる授業」の中で習得した資質・能力を使いこなし、実生活の中で自分の思いを進んで相手に伝わるように書き表すことができる力を育成する授業づくりに取り組む。
29	理科指導力向上研修の企画研究 ～専門家から学び、授業の質を高める～	○糸乗 前 大山 真満	水口中学校 教頭 渡辺 幸寛 (滋賀CST研究会会長)	河瀬小学校 教諭 多和完章 (滋賀CST教員 研修担当)	小中学校理科の地学分野でより良い観察を行うためには、児童生徒の興味関心を高める必要がある。そのためには、指導する教員のその分野の知識が豊富であるかどうかという点も大きい。今回、専門家から指導を受け、知識を増やすことで、授業の展開がどのように変わるか検証する。
30	教科横断的な学びを通した言語能力の育成 —小学校国語科「書くこと」で学んだ知識を使う授業実践—	山本 はるか	栗東市立治田小学校 校長 田中 覚	栗東市立治田小学校 教諭 中村 百合	小学校国語科「書くこと」で児童が学んだ知識を「使える」段階にするための、教科横断的な学びの授業実践のあり方を探求する。

No.	プロジェクト名	本学担当者	共同研究機関・担当者		研究内容(連携事業内容)
31	義務教育現場を対象とした【声を鍛えるトレーニング】の作成・実施 「フィジカルトレーニング編…耳を育てる」	渡邊 史	滋賀大学教育学部 附属小学校 校長 神部 純一	教諭 矢吹 雄介 (4年生担任・合唱部指導者)	●発達期にある児童生徒を対象として「表現ツール」としての「声」の構築、汎用の動機づけを行う。 ●児童生徒が「自身の声」と向き合うことで「自分自身」と客観的に対峙、「客観的視点」を獲得していくためのきっかけとなることを期待し、トレーニングを実施する。 ●「声表現」の具体的スキル構築に取り組むことで、「声」を構築するために必要な身体各部の働きを意識させることで心身の健やかさを保つための様々な「気づき」「自己確認」のきっかけを提供する。
32	石山っ子わくわく親子で畑体験隊	○森 太郎 久保加織 石川俊之	大津市石山公民館 館長 深尾 和之	石山公民館 生涯学習専門員 清水 琴野	農作物の栽培や観察など実体験を重視して農と食の大切さを理解し、食の安全・安心について考えるような「食農教育」が求められている。しかし、学校現場において、そのニーズに対応できるプログラムの確立、対応できる教員の確保は不十分である。そこで、地域の住民(公民館、ボランティアスタッフ)と連携して、園児、小学生の親子を対象に畑体験活動を実施し、「食農教育」の地域連携プログラムを開発する。さらに、教育学部の学生が主体的にプログラムを計画・実施する場面を設け、教育現場において「食農教育」に対応できる人材を育成する。
33	エージェンシーの発達を保障する小学校社会科教育の創造	岸本 実	甲賀市立水口小学校 校長 早川 和彦	教諭 中川 翔太	学習者が学習の主体として、エージェンシー(責任のある主体性)を発揮するためには、自己の学習を自らアセスメントし、調整していくことが求められる。このように学習者を学習および学習アセスメントの主体として位置づける小学校社会科の授業を開発するにはどうすればよいか。この問いを解明することが本研究の目的である。
34	創発学級をつくる教師の指導力を向上するOJT研修	岸本 実	近江八幡市立岡山小学校 校長 野瀬 準子	教諭 尾賀 紀子	子どもが主体となって学級をつくるような学級(創発学級)を経営していくための教師の指導力を、学校運営、学年経営と連携したOJTにより、キャリアステージに応じて、向上する方法と組織体制を明らかにすることが、本研究の目的である。
35	話し合いを進める資質能力の系統表を軸とした校内研修とカリキュラム・マネジメント	岸本 実	甲賀市立希望が丘小学校 校長 村地 昭彦	教諭 瀬戸山 茜	話し合いを進める資質能力の系統表を軸とした校内研究の成果を日常化し、カリキュラム・マネジメントに活用する組織と方法について明らかにすることが本研究の目的である。